オーストリアの宮廷狩猟（２）
― 狩猟好きな皇帝たち―

野　島　利　彰

宮廷狩猟

前回、フランツ・ヨーゼフが1885年８月に行なったシャモア猟を宮廷狩猟の典型としてご紹介した。一般的にこの時代の宮廷狩猟には４種類あった。

１．皇帝および皇族の狩猟
２．国賓歓迎などの国家行事としての狩猟
３．宮廷またはその客による個別的な射殺
４．猟区の係員による個別的な射殺（保護育成のため、ないし宮廷の食膳のため）。

皇帝、皇族とその客が参加する狩猟のプログラムは厳しく決められていた。狩猟の段取りは林務長官と帝室地区狩猟官とが責任を持ち、客の世話は宮内省家政局が担当し、客が滞在中快適に過ごせるようすべての事柄を管理した。客の安全には国家警察が責任を持った。３は宮廷の行事ではなく皇族が私的に狩猟を行う場合で、規制が緩やかであった。例えば皇帝の娘婿フランツ・ザルヴァートアが皇帝狩猟地のアイゼンエルツで狩猟をした時、彼は牧人小屋に泊まり、食事は缶詰で、料理には焚き火か固形燃料を使った。

従って1885年のシャモア猟は皇帝および皇族の狩猟のカテゴリーに該当する。参加者は皇帝以外に、バイエルン王子レオポルト、旧トスカナ大公国の王レオポルト４世、その二人の息子フランツ・ザルヴァートアと息子カール・ザルヴァートア、そのほか各人の侍従武官であった。バイエルン王子レオポルトは皇帝の次女ギーゼラ皇女の婿である。レオポルト４世は、皇帝レオポルト２世（在位1790－92）の次男、トスカナ大公フェルディナントの家系に属している。トスカナ公国がサルディニアに併合されて消滅したため彼はウィーンで

亡命生活を送っている。

宮廷狩猟の第２の特徴として狩猟が行われた場所である。シャモア猟の行われたトラウンシュタイン山は皇帝家の狩猟地である。1848年の革命後、それまで行われていた狩猟特権が廃止され、皇帝も狩猟に関しては一般市民と同列になり、狩猟権の行使は皇帝が個人的に有する土地と帝室財産、また狩猟のために借用した土地に制限された。逆に言えばそれ以前は皇帝は他人の土地でも狩猟ができた。これを狩猟特権ないし狩猟高権（Jagdhoheit）と言う。

ところで狩猟地は単に動物を撃って殺すだけの場所ではない。皇帝は狩猟動物に餌を与え、それを飼育し、また絶滅の危機に瀕している狩猟動物の再野生化に莫大な費用を支出した。帝室狩猟地は非常に手入れが良く、革命後、農民や市民による無頓着な殺戮を受けた狩猟動物に保護と逃げ場を提供した。このようにして狩猟動物が豊富な帝室狩猟地が成立し、その一部は1919年まで存続した。オーストリアではラインツ、ラクセンブルク、バート・イシュル、アイゼンエルツ、ミュルツシュテークが帝室狩猟地であった。

第３の特徴は1885年のシャモア猟はドイツ・オーストリア的狩猟であった。多数の人員を動員して獲物を駆り集め、それを一定の方向に誘導し、撃ちやすい場所に設置された射手台から貴人たちが思うままに動物を撃ち倒した。狩猟の成果は厳密に記録され、多数を撃つことが尊いとされた。

第４に宮廷狩猟にはそれを運営する組織があった。宮廷の狩猟を司るのは狩猟長官で、高位の貴族が任命された。その下に各地の帝室狩猟地の管理者の長がいた。トラウンシュタイン山のあるザルツカマーグートは11の狩猟区に分けられ、各区には狩猟員が配置された。この狩猟員たちが宮廷狩猟を末端で支え、狩猟が円滑に行われるよう努力した。彼らは日常的に狩猟動物の状況を観察し、頭数や年令構成、角の形態などを把握し、狩猟動物が増加するよう配慮し、餌のない冬季には餌を与え、生育地の森林を管理した。またいわば皇室財産を守るため日常的に管轄地域を見回り、密猟を防止し、密猟者を検挙する警察官の役目も果たした。

帝王学としての狩猟

皇帝たちが狩猟を行うのはそれが王者だけに許された特権であったからという以外にないが、同時に彼らは狩猟を熱狂的にを好んだからでもある。マクシミリアン１世（在位 1493 － 1519）から事実上最後の皇帝とも言うべきフランツ・ヨーゼフ１世（在位 1848 － 1916）に至るまでハプスブルク家の皇帝たちはほとんど全員が狩猟好きであった。彼らが狩猟好きになった要因には教育もまた重要な部分を担っている。帝王教育としての狩猟教育はハプスブルク家では古くからの伝統であった。

ハプスブルク家の中で最大の狩猟家はマクシミリアン１世（在位 1493 － 1519）であろう。彼はその版図のさまざまな地で狩猟をした。チロルでシャモアを狩り、アウグスブルク付近の河岸林で鷹狩を楽しみ、オランダでクマ狩りを行った。しかし彼は単なる殺戮者ではなく、自ら「帝国の狩猟長官」と称し、偉大な狩猟家であろうとした。彼は狩猟倫理の確立にも努力し、例えば狩猟動物に対しまだ普及し始めたばかりの銃を使うことを禁じた。子供のときからマクシミリアン１世は馬や猟犬などの動物や武器に興味を持ち、その扱いに慣れていた。彼の父フェルディナント１世は彼が14才のとき長期間の探索猟に連れて行った。15才のとき彼はアウグスブルク司教のもとにしばらくの間、客として滞在し、そこで彼は十分に狩猟を体験した。司教は60頭の馬と広大な狩猟区を持っていたのである。しかし彼のほんとうの狩猟の師となったのはハイセンブルク公ディーポルト・フォン・シュタインで、彼はマクシミリアンに狩猟の職人的技術を教えたばかりでなく、自然に対する愛も教えた。またチロルのジークムント公から彼はシャモア猟を習い、チロルの山岳地帯にいるシャモアを石弓で撃ち、長い棒で突き落として狩った。

レオポルト１世（在位 1658 － 1705）の二人の息子ヨーゼフもカール（後の皇帝カール６世）も小さい時から狩猟家なるように教育された。カールの東宮長官リヒテンシュタイン公は偉大な狩猟家であった。カール皇子は10才で初めて数丁の銃をもらい、15 才のとき鷹狩りに出て 66 日間に 433 羽の獲物を得た。

彼はウィーンの周辺各所に専用のキジ保護区を作ってもらい、自分の狩猟区とした。

また最近の皇帝ではフランツ・ヨーゼフも父フランツ・カール（彼は1848年兄フェルディナント１世が三月革命平定後に譲位したとき、自分は受けず18歳の息子に帝位を譲り、皇帝にならなかった）から狩猟教育を受けた。彼は４才の時、クリスマスツリーの下に置かれたたくさんのプレゼント中でおもちゃの銃に最初に手を伸ばし、父を喜ばせた。狩猟好きであることは皇帝家にとっても喜ばしいことであった。父はそれ以来帝室狩猟園、今日のラインツ狩猟園へ息子を定期的に連れて行った。息子はそこで狩り出し猟あるいは餌場で動物が撃たれる様子を熱心に見守った。彼の教育係となったボンベレス伯爵も同じように熱狂的な狩猟家で、皇太子に狩猟の面白さを教えた一人であった。幼い皇太子はシェーンブルン宮殿の庭園でスズメやハトを撃ち、近くを流れるウィーン川の河岸林でカモを撃った。父親に連れて行ってもらったラインツ狩猟園で彼が初めてアカシカを撃ったのは12才のときであった。そして15才でイシュル近くの山で最初のシャモアを撃ち、シャモアが倒れた時、皇太子は嬉しくて「ユー」と叫び声を挙げて喜びを表現し、お付きの狩猟員から注意を受けた。

皇帝フランツ・ヨーゼフもその息子ルドルフに早くから狩猟教育をした。皇太子ルドルフは９才で父から山岳用猟銃を贈られた。山岳用猟銃とは携帯に便利なように普通の猟銃より銃身をやや短くした猟銃であるが、皇帝はこの銃をわざわざ皇太子のためにイシュル出身で、銃製作の名人ライトナーに作らせた。そしてこの銃で９才の皇太子はイシュル近くの山で最初のアカシカを撃ち、最初のシャモア３頭を撃った。

ウィーンの森とドナウ河岸林

皇帝たちが狩猟に傾倒できたもう一つの理由は自然環境であった。ウィーン周辺地域は狩猟動物が豊富で、「ヨーロッパで最も高貴な狩猟園」と呼ばれ、その動物の多さは「狩猟動物が多すぎて狩猟がつまらない」ほどであった。皇帝

たちは城を出てウィーンの森あるいはドナウの河岸林に向かえばすぐに狩猟を行うことができた。

ウィーンは「ウィーンの森」という言葉で代表されるように現在も周囲を森に囲まれている。ドイツの都市近郊に見られる森は現在針葉樹がほとんであるが、ドナウ河の右岸に展開する「ウィーンの森」はブナやナラを主体とする広葉樹の森で、中に隣国ハンガリーからの温暖な気候の影響を受けてクロマツが点在する。ナラの実であるドングリとブナの実は、かつて両者がヨーロッパ各地でブタの餌として用いられたことから分かるように、イノシシを育てる実であった。現在ウィーンの森が広葉樹であるのは、自然植生がそうであるのと同時に、狩猟のために積極的に保護されたからでもある。

地名からもイノシシの多さが推測できる。東進してきたドナウ河が東南に向きを変えるのはドナウの右岸にある丘陵地帯のためである。河に接して聳える小高い岩山がレオポルト山で、この頂にハプスブルク家以前のオーストリアの支配者、バーベンベルク家の辺境伯レオポルト３世が妃アグネスのために館を建て、館はオーストリアのアクロポリスと呼ばれた。ここからの眺めは雄大で、滔々として流れるドナウ河が右に曲がって行く様子を、そしてその右岸に位置する古都ウィーンの市街を見渡すことができる。レオポルト山に連なる山が高さ 500 mほどのカーレンベルク Kahlenberg で、やはりウィーン市街を見下ろす観光地点である。カーレンベルクの名は現在の山の姿から「ハゲた（kahl）山（Berg)」と理解されているが、語源的には kahlen は「吠える」を意味する kallen で、猟犬が狩猟動物を追跡する際に吠えることを意味した。そしてこの山はザウベルク Sauberg と呼ばれる丘陵地帯の端に鎮座している。ザウベルクは「イノシシ山」の意で、この付近の森林にかつて多数のイノシシが生息し、イノシシ猟が盛んに行われたことに因む名称である。またレオポルト３世は1095年その居城をずっと上流のメルクから同じドナウ河畔の町クロスターノイブルクに移した。この町はレオポルト山を挟んでウィーンの反対側、ウィーンより上流にありレオポルト山から見下ろすことができる。レオポルト３世は熱狂的な狩猟家だったので、この移転も狩猟動物の多い地域への移転と

考えられた（この後1156年ハインリヒ２世の時代にオーストリアは大公領に格上げされ、ウィーンがその居城となる）。

女帝マリア・テレージアの時代にイノシシ害に抗議する激しい農民暴動があり、マリア・テレージアは暴動を軍隊出動と首謀者の死刑で鎮圧した。しかし彼女は農民の苦しみに理解を示し、ウィーンの森でのイノシシ射殺数を増やし、その肉を庶民に低価格で投げ売った。しかしその後も農民の不満は収まらず、ついにマリア・テレージアは1770年８月の勅令で、イノシシは囲いのある狩猟園でしか保護してはならないこととし、それ以外の場所でイノシシを見かけた場合には自由狩猟、つまり皇帝家および貴族が狩猟権を放棄し、誰が撃っても良い事とした。この事件も農民がその害に苦しむほど付近にイノシシが豊富に生息していたことを示している。この時イノシシを狩猟用に保護するためにウィーンの森に造られた狩猟園が「ラインツ狩猟園」で、皇帝家の行事や外交に欠かせない重要な狩猟地であった。現在ウィーン市の公園となっており、2400haもの広大な面積を持っている。今でも狩猟動物が飼育され、一部を狩猟地とし、有料で希望者に狩猟動物を撃たせている。

ドナウ河はかつて幾重にも蛇行し、本流とは別に細かく枝分かれした多数の流れを持ち、定期的に氾濫を起こし、周辺に氾濫原（Au）として延々たる河岸林（Auwald）を有していた。ウィーンの下流域、ドナウの左岸の河岸林からスロヴァキア国境までの広大な地域はかつてロープアウ（Lobau）と呼ばれ、古くから帝室狩猟地であった。現在は右岸にあるプラーターもかつてここに属した。ロープアウは皇帝の狩猟地と言っても柵や壁で囲まれた「狩猟園」ではなく、一部に柵が設けられただけで、50kmにもおよぶ河岸には柵がなく、開放されていた。それゆえここのアカシカが他の地域へ、あるいは他地域からロープアウへ出入りするのは自由であった。また日本のシカが海を渡ったように、ドナウのアカシカも苦もなく流れを泳ぎ渡り、冬でも氷の流れがひどくさえなければ渡った。この河岸林に生息するアカシカは「河岸林アカシカ」（Auhirsch）と呼ばれ、枝角にイボ状突起が多数あり、多孔質であるなどの特徴により山岳地帯のものとやや異なっている。氾濫がもたらす豊かな栄養分はその地に生え

る植物も滋養豊富にし、それを喰って生きるアカシカの身体もその角も大型になった。改修により氾濫もなくなった現代のアカシカは体重150kgもあれば大型といわれるが、1690年に撃たれたアカシカは340kgもあり、当時の「河岸林アカシカ」の大きさが想像できる。ヨーロッパのアカシカは世界で最も姿の美しいシカ類と言われ、Edelhirsch「気高いアカシカ」と呼ばれるが、ドナウのアカシカはことに美しく、その枝角は優雅な曲線を描き、二つの角の間は大きく開き、河岸林の中で「河岸林アカシカ」を見かければ、ほんとうに「気高い」という印象を受けたと言われている。

宮廷狩猟の一年

ハプスブルク家の皇帝にとって狩猟は欠くことのできない重要な営みで、宮廷行事に組み込まれていた。フランツ・ヨーゼフ時代の1865年に行われた宮廷狩猟を『狩猟新聞』から拾い出して、簡単にまとめてみると、

1月 7日	カーレンベルクで皇帝フランツ・ヨーゼフとその父フランツ・カール大公がキツネ撃ち。
1月 11日	帝室狩猟園ノイベルクで皇帝とトスカナ大公がアカシカの狩りだし猟。
同	ラインツ狩猟園でフランツ・カール大公がキツネ撃ち。
1月 12日	ライツ狩猟園の別の場所でフランツ・カール大公がキツネ撃ち。
1月 14日	カルテンロイトゲーバー帝室林で皇帝および多数の貴族がキツネ撃ち 以下キツネ撃ちは2月3日まで続く。
1月 17日	ラインツ狩猟園で、皇帝がプロイセン王子フリードリヒ・カールを歓迎するイノシシ猟を開催。1月19日にも狩猟園の別の場所で開催。
4月 19日	帝室狩猟区プラインで皇帝とトスカナ大公がヨーロッパオオライ

チョウ猟。

4月22日　帝室狩猟区プラインで皇帝とトスカナ大公がヨーロッパオオライチョウ猟。

4月26日～27日　帝室狩猟区ノイベルクで皇帝とトスカナ大公、その息子カール・ザルヴァートア大公（皇帝の娘婿）がヨーロッパオオライチョウ猟。

5月 1 日～ 4 日　帝室狩猟区ノイベルクで皇帝とトスカナ大公がヨーロッパオオライチョウ猟。

5月 8 日～ 10 日　帝室狩猟区ノイベルクで皇帝とトスカナ大公がヨーロッパオオライチョウ猟。

5月 15 日～ 17 日　帝室狩猟区ノイベルクで皇帝、トスカナ大公、ザルヴァートア大公がヨーロッパオオライチョウ猟。

日時が明確でない（『狩猟新聞』1865年９月30日号）が、皇帝夫妻が子供たちを連れバート・イシュルで夏を過ごし、皇帝は折りを見て狩猟を行った。ことにヴァイセンバハのシャモア猟では皇妃も猟を見物した。さらに皇帝夫妻はラングバート湖の美しい帝室狩猟小屋で３日間過ごし、皇帝は隣接するライヨンで小規模の狩り出し猟を数度行った。

10月27日　プラーターでレオポルト、エルンスト、ライナーの各皇族およびトスカナ大公がドイツのコーブルク王子、ヴュルテンベルク王子を歓迎する狩猟を行った。成果はキジ865羽、ノロシカ39頭であった。

11月 8 日　プラーターでレオポルト大公、トスカナ大公がコーブルク王子、ヴュルテンベルク王子とともに狩猟。成果はウサギ567匹、シャコ10羽。

11月13日～14日　帝室狩猟区ノイベルクで皇帝、トスカナ大公、ドイツのホーエンローエ王子がアカシカの狩り出し猟を行う。

11月22日　ライヒェナウ帝室狩猟区で皇帝、トスカナ大公がシャモアの狩り

出し猟を行う。皇帝は朝５時に到着、夕方７時にウィーンに戻る。

12月２日　プラーターでレオポルト大公、ジークムント大公がヴュルテンベルク公と狩猟。成果はノロシカ２頭、キジ336羽、ウサギ72匹、キツネ１頭、アナウサギ４匹。

12月６日　ヴァイトリング狩猟区でフランツ・カール大公、トスカナ大公がキツネ撃ちを行う。

12月７日　プラーターでヴィルヘルム、レオポルト、ジークムント、エルネスト、ライナーの各皇族、トスカナ大公が狩猟。成果は雄キジ282羽、ウサギ25匹、アナウサギ13匹。

1865年の記事には載っていないが、ウィーン周辺には通常３月中旬にシギが南から、また10月ころに逆に南へ帰るシギが渡ってくる。この両期間にシギ猟が行われる。1873年の記事にはルドルフ皇太子が３月16日にウィーン近郊のオルトでシギ猟を行い、皇帝が３月14日から15日、および17日から21日がハンガリーのゲデレーでシギ猟を行ったとある。動物も野菜や果物と同じで、その出現が暦となり、その狩猟が季節を味わう年中行事となる。

ところで冬の風物詩とも言うべきキツネ撃ちが何度も行われているが、これは馬でキツネを追うキツネ狩りと違い、主としてキツネを餌で誘き寄せ、それを撃つ狩猟である。キツネ撃ちも面白い狩猟方法なのでここに紹介する。ウィーンはワインの生産地がある首都として有名で、その生産地グリンツィングはかつてキツネ撃ちに良く使われた。ぶどう園は森からのイノシシ害を避けるために古くから塀が設置されていた。フランツ・カール大公はこの塀を利用してよくキツネ狩りをした。ブドウの摘み取り直後の９月から10月ころに馬の死骸が林内に置かれた。死骸は宮廷狩猟の行われる12月あるいは１月まで順に、次第に塀の近くに向けて置かれた。使用する馬の死骸は狩猟庁が農民から買い集めたもので、８頭から10頭必要であった。こうしてだんだんとキツネの餌である馬の死骸は塀のそばに設置されている射手台に近づけられた。狩猟の日に勢子70人から100人がウィーンの森の数カ所を遠巻きにし、キツネを射手たちに向けて狩り立てて行く。しかし実際にはこれで射殺されるキツネは10頭

から20頭で、あまり多くなく、その代わりノロシカ、ウサギ、鳥類が多数獲物となった。

カール６世の狩猟暦

狩猟好きの皇帝たちの中でもことに狩猟が好きであったカール６世（在位1711－40）は一年を狩猟の行事で分けた。狩猟年はプラーターの森、現在は大観覧車のある市民公園であるが、ここに南国で越冬したシギが渡ってくることで始まり、次にドナウ河岸林での鷹狩りが続く。４月末になると宮廷はウィーン郊外のラクセンブルク宮に移動した。ラクセンブルク宮は広大な敷地を持ち、多数の池や水路を備え、水鳥が集まりやすいように造られている。ここではもっぱら鷹狩りでサギを捕らえた。1683年のトルコ軍によるウィーン包囲戦争の際に一度破壊されたが、レオポルト１世が再建を始め、カール６世がそれを完成した。ラクセンブルクには６月半ばまで滞在し、その後ファヴォリータに宮廷は移った。ファヴォリータは皇帝マティアス（在位1612－19）が建てた城館で、現在はウィーン市内にあり、アウガルテンの名で有名であるが、かつてはドナウ河畔に広がる河岸林地帯に位置していた。河岸林にはアカシカが多数生息し、このアカシカに対する探索猟が５月半ばに始まった。６月に恒常的に設置してある柵内にアカシカを追い込んで撃つ「閉じ込め猟」が行われた。８月末に大掛かりなアカシカ猟の最後としてドナウ河岸で水上猟が行われ、アカシカが水の中に追い込まれ、泳いでいるところを撃たれた。その後、繁殖期にあるアカシカの探索猟が９月いっぱい行われ、９月末に宮廷はハルプトゥルンに移動する。ハルプトゥルンはハンガリーとの国境にあるノイジードラー湖の東岸にある城館で、ここではキジとウサギを狩った。この後再びファヴォリータに戻り、10月半ばにウィーンに帰った。10月半ばから12月末までイノシシの追撃猟とウサギの追跡猟が行われる（追撃猟も追跡猟も騎馬で動物を追う猟。名称の違いは対象動物の差）。１月初めに皇帝はプラーターでアカシカの雌と仔を「探索小屋」から撃つ。１月２月はウサギの追い込み猟に使われる。断食期

間の最後にプラーターでキツネ・アナグマ潰しが行われた。これは民衆のために行われる一種の民衆祭で、貴族の男女が持つテニスのネット状の細長い網を地面に置き、その上を通過するキツネを機を見て跳ね上げ、トランポリンのように何度も跳ね上げ、最後に網を引いて地面に激突させて殺す、残酷な遊びである。

土地所有と狩猟権

狩猟というと私たちは、ハンターが銃を持ち、森林に入って動物を探し、見つけたら撃つ―いわゆる「探索猟」―とイメージし勝ちである。しかしオーストリア皇帝フランツ・ヨーゼフのシャモア猟は私たちの想像と異なった形をしている。宮廷の行事として行われたこの狩猟では多数の勢子を使って多数の動物を駆り集め、逃げてくる動物を皇帝や貴族が射手台で待ち受けて撃ち、多数の動物を殺した。私たちのイメージである探索猟が一般化したのはオーストリアでは３月革命(1848年)以降である。フランス革命による王制の廃止により狩猟権は王や貴族の独占物から庶民の手に渡った。この変化が３月革命後のオーストリアにも現れた。即位まもない若き皇帝フランツ・ヨーゼフは狩猟法を改正し、狩猟権を土地所有権に結びつけ、他人の土地での狩猟を禁じた。これにより土地所有者、ことに市民階級が新たな狩猟家として登場し、探索猟や待ち猟の一般化をもたらした。つまり探索猟が一般化するにはまず野生動物が誰の所有物でもないこと―無主物―が前提条件であった。

中世以前は野生動物は原則として無主物であった。無主物は先に見つけて手に入れた者に所有権が生じる（無主物先占）。現行のドイツ民法典第960条も野生動物を無主物と規定している。しかし狩猟に関する特別法である狩猟法で狩猟権を土地所有に結び付け、野生動物に事実上所有者が存在する形になっている。つまり野生動物がある土地に滞留する限りその土地の狩猟権保有者に狩猟権があり、狩猟権保有者が捕獲ないし射殺した場合に彼の所有物となり、また他人の土地にいる狩猟動物を捕獲すれば刑法により窃盗罪と同じ財産罪である

密猟罪として罰せられる。

中世以前の、野生動物が無主物である時代は王権の確立とともに終わった。王権はまず自己の所有する森林で他人が狩猟をすることを禁じた。やがてその排他的狩猟権は徐々に帰属する農民の所有地にも、つまり他人の土地にも拡大した。他方、これは初め皇帝や王、あるいはその権限を委譲された貴族のみの権利であったが、これも拡大し豪族や大土地所有者が同じ排他的狩猟権を要求し、彼らの所有する林野では他人の狩猟が禁じられた。

その後、領邦君主による一円的支配が成立すると、領邦君主は全土に狩猟高権を主張した。これは森林と狩猟に対する監督・警察権を名目に君主以外の狩猟を禁止し、土地所有に関わりなく全土に君主の排他的狩猟権を唱えることである（例えばオーストリア王ルドルフは1329年その領邦内に排他的狩猟権を宣した）。排他的狩猟権の宣言は当然内部の豪族や大土地所有者との間で狩猟権をめぐる軋轢が生じたが、領邦君主が勝てば大型動物に対する狩猟権を獲得し、旧所有者にはノロシカ、ウサギなどの小型動物に対する狩猟権が残された。敗れた場合でも君主が狩猟権を授与した形となり、名目的に領邦君主の狩猟権が貫徹した。授与した権利であれば君主にとりその与奪は自由であり、狩猟権所有者は狩猟権に関し領邦君主に依存することとなった。

こうして大型狩猟動物であるアカシカやイノシシは領邦君主の独占的所有物となり、狩猟動物は君主による厳重な保護を受け、それを殺したり傷つけたりすれば加害者は死刑を含む重罰を受けた。また野生動物の独占化は一方で土地所有を超越した狩猟となった。これが後に述べる追走猟で、狩猟者は狩猟動物を追って森であろうと農地であろうと構わず追うことができた。他方で野生動物の独占化は、それをどこの土地からでも追い立て、多数集めることのできる権利となり、後述する囲い込み猟の基盤となった。

権威誇示のための狩猟

領邦君主や貴族にとり狩猟は何よりもまず権威を示す儀式であり、狩猟動物

はその道具として不可欠であった。権威はもちろん彼らが動物の生命に関し生殺与奪の権を持っていたことからも生じたであろう。その意味では多数を殺せばそれだけ権威も増加したと言える。しかし権威の淵源はむしろ動物を殺すために華やかな祝祭の場を設ける経済力にあった。その良い例は後で詳しく述べるフランスの狩猟の場合である。ここではたった一頭のアカシカを多数の猟犬と騎馬で追って殺すだけで、そこには食糧を獲得する手段としての意味は全くない。むしろたった一頭の動物のために、その準備と設備投資に多大の費用を掛けることに意味があり、浪費できることに権威が存在した。

ヨーロッパでは狩猟が貴族階級にのみ許された特権であったために、狩猟を行い得ることが逆に貴族階級の証明であった。現在でもこの考え方は生きており、狩猟家の意識の根底には、狩猟が好きであることよりは、自分が庶民から超越した存在であることに矜持があるように見える。ドイツでよく言われたことであるが、成功した実業家がヨットも持ち、飛行機の操縦免許も持っていれば、残るは狩猟免許を持つことだけである。それほどに狩猟のステータスシンボルとしての地位は高い。ヨーロッパの最高権力者が狩猟をその一つの飾りとして加えるのも、かつての貴族的思考に由来する。

ルーマニアのチャウシェスク大統領は最高権力を極め、まるでローマ帝国皇帝のようにその手に王笏まで持ち、自分に権威あることを示した。当然、狩猟もその権威の証明に加えられた。猛獣のクマは西ヨーロッパではほとんど絶滅してしまったが、彼はこのクマに対する狩猟を大統領の特権とし、外国の高官を招きクマ猟を行った。狩猟が権威を示すとの考え方は脈々として生き残り、東ドイツでは多くの高官が狩猟に興じた。かつて東ドイツのホーネッカー首相は内外の高官を招待し国家的行事としてウサギ狩りを挙行した。その際彼は予め撃たせて冷凍保存しておいたウサギを狩猟前に解凍し、それを当日の獲物に混ぜて並べ、多数撃つことを権威とするオーストリア皇帝のように、その多さを「社会主義の勝利」と誇った。国家保安省（シュタージー）のミールケ長官の場合も同じである。彼は専用の狩猟区をショルフハイデに持っていた。ここはかつてプロイセン王、さらにはドイツ帝国皇帝の専用狩猟区であり、後にナ

チス高官の狩猟区となった。ミールケ長官は専制国家の伝統をいわば相続しただけであった。彼は自ら狩猟用制服をデザインし、それを部下に着せ、専制君主そのままに狩猟を楽しみ、庶民が食糧不足に苦しんでいる時も、ショルフハイデのアカシカたちは十分な餌を与えられていた。

追走猟と囲い込み猟
―フランス式狩猟とドイツ式狩猟―

フランツ・ヨーゼフのシャモア猟はドイツ・オーストリア式狩猟の典型であったが、これはイギリスやフランスで盛んに行われた狩猟とは異なっていた。フランスでは中央集権制度が早くから発達したため、島国のイギリスも王権が確立と大型の狩猟動物が早くから減少したため異なった狩猟制度となった。フランスの中央集権制度は狩猟に関しては独占的狩猟権の形で現れ、広大な支配地域を狩猟のために自由に使用できた。これと対照的にドイツは多数の国と小さな伯爵領に分割され、各自がそれぞれその狭い領域内で狩猟を行い、互いに異なった狩猟体系を発展させた。イギリス・フランスでは王の狩猟といえば広大な土地を自由に使い、吠える猟犬群で狩猟動物を追跡する「賑やかな狩猟」が支配的であった。ドイツ・オーストリアはすべての点でフランス文化に憧れ、「賑やかな狩猟」である追走猟も採用したかったが、土地条件の制約と費用の点で実施には困難を伴い、少数の王家にしかできなかった。そのためこれに代わり、人数をあまり使わず、猟犬も用いない狩猟である「静かな狩猟」、すなわち探索猟や待ち猟が行なわれた。しかし「静かな狩猟」は個人的な遊びで人目に付かず、危険に打ち勝つ騎士的要素と華麗さにも欠けたため、「坊主の狩猟」と軽蔑された。

狩猟文化上のフランスの地位

フランスの華やかな追走猟はドイツ各王家の憧憬の的であった。それは中央

集権を早く確立し、絶対主義王制となったフランス宮廷に憧れを持ったことにもよるが、狩猟に関しフランスはヨーロッパで常に先進国であったことはあまり知られていない。フランスではすでに14世紀に狩猟動物が詳しく描かれ、枝分かれしたアカシカの角の先端の一つ一つにすべて名前が付けられ、いわば狩猟学的にも進歩していた。またフランスには古くから狩猟に関する文献が存在した。フランスでは13世紀後半に成立したと見られ、現存する最も古い狩猟に関する文献『アカシカ猟』がある。これは「私はお前に教えよう。狩猟補助員に手伝わせてアカシカを仰向けにするときは枝角の間に背中の線が来るようにすることを」と狩猟の先達が弟子に教える形をとる教訓詩で、ラテン語ではなく古フランス語で書かれている。また1350年ころ美しい写本『中庸王と理性王妃の狩猟書』が書かれた。さらにこの写本を取り入れ、網羅的な狩猟書となった『ガストン・フェビュスの狩猟書』が1387年ころに著わされた。この書はさまざま動物を対象とした狩猟を扱い、それに極彩色のミニアチュアを添えた美しい写本で、当時のさまざまな狩猟方法と狩猟具が描かれ、狩猟文化史的に非常に重要な文献である。この書はさらに15世紀末に印刷され、ヨーロッパ各地の宮廷に広まった。さらに1590年にフユーの『新狩猟書』が出版された。これはドイツで非常に多く翻訳出版された。このようにフランスは狩猟に関する文献と洗練された狩猟文化で中世以来トップの座を占め、18世紀まで維持された。

追走猟

フランスではその前身のケルト時代からスポーツ的狩猟が盛んで、動物を追うのに３頭以上の猟犬を使ってはならないなど一定のルールをもって行われた。その後もフランスではスポーツ的狩猟が好まれ、複数の猟犬に一匹のウサギやキツネなどを追わせ、狩猟家が馬でそれを追う追跡猟（Hetzjagd)、あるいは同じ方法で猛獣のイノシシやクマを追う追撃猟（Hatzjagd）が盛んであった。追われた動物はいずれ逃げ疲れて立ち往生し、攻め寄せる猟犬の群れに角や牙で抵抗した。この場合、猟犬は狩猟動物をかみ殺してはならなかった。猟犬は良

く訓練されてあり、動物をただ足止めして逃げられないようにし、狩猟家の到着を待った。最終的に狩猟動物を殺すのはあくまでも狩猟家で、猟犬の仕事ではなかった。バロック時代に追跡猟は一定の様式を備え、アカシカを対象にした追走猟（Parforcejagd）に発展し、これが典型的なフランス式狩猟となった。

追走猟はまずその準備から始まる。多数の狩猟員は日常的に森林を管理し、そこに現在、頭数、性別のみならず、ことに枝角の大きさ、角の小枝の数やその形状についてどのようなアカシカがいるかを把握した。狩猟員は前もって狩猟に相応しい複数のアカシカを候補として選び、その存在を確かめておいた。狩猟の主催者である王侯はそのうちどれを追うかを決定する。先導犬（Leithund）と呼ばれる嗅覚犬は非常に鼻が利き、異なるアカシカの多数の足跡の中から指定されたアカシカの足跡を確認し、その居場所へと狩猟員を案内することが出来る。狩猟員は猟犬に紐を付け、足跡を追わせ、目標とするアカシカが不安を感じ移動するよう強いる。こうしてこのアカシカは次第に他のアカシカと切り離なされる。孤立したことが分かったところで追跡猟犬群がそのアカシカの足跡に連れてこられ、彼らにアカシカの臭いを確認させる。猟犬群は最低12頭で構成されている。ここでファンファーレの響きとともに猟犬の群れが放たれ、追走が開始される。アカシカが逃げるのを防ぎ、望む方向に導くために森の周囲に狩猟員が配置される。この狩猟員はやはり猟犬群を連れており、騎馬を含めた多数の人員からなる。彼らが連れている猟犬は追撃している猟犬の交代にも使われる。川が近くにある場合には狩猟員はアカシカが川に逃げ込まないように小舟に乗る。また猟犬の交代が必要であるときにはアカシカが逃げてくるであろう場所で、狩猟員が猟犬を連れて待機している。騎馬の狩猟員はアカシカについて専門的知識があり（hirschgerecht）、乗馬が巧みで、そしてホルンを扱える。彼らは猟犬を統率しつつアカシカを追い、馬を馳せながら何が起きているかをホルンで仲間の騎馬あるいは主催者の貴族に知らせる。追走は平均で約２時間掛かった。しかし老練なアカシカは疲れ果てて猟犬の群れに追いつかれるまで、６時間から９時間も逃げることができた。アカシカが疲れ果てて立ち止まり、枝角で猟犬に戦いを挑み始めたら狩猟員は馬から下り、

アカシカの背後に回り後ろ脚の腱を猟刀で切り、これ以上逃げられないようにする。ここで追走猟の主催者（＝狩猟主 Jagdherr）である王侯が狩猟動物にトドメを与えた。狩猟員がアカシカの右前脚を蹄を付けて関節部分から切り取り、狩猟主に栄誉の記念として捧げる。この後厳しく定められた儀式に則りアカシカの内臓が抜き取られ、皮が剥がされて、解体が行われる。猟犬の餌として内臓や脂肪、くず肉が剥がされたアカシカの皮の上に撒かれ、血が混ぜられ、さらにパンやチーズが加えられる。猟犬は狩猟員の合図で一斉にそれを貪り食う。これがいわゆる「犬の宴会」（キュレーCurée）である。この場面はゴットフリート・フォン・シュトラースブルクの『トリスタンとイゾルデ』の 2996 － 3042 行にも描かれている。『トリスタンとイゾルデ』によるとこの時代にはアカシカの体の各部分は華やかな行列に運ばれ、貧しい人々に分け与えられた。

狩猟員の専門性

狩猟員はアカシカに関し専門的な知識を持っていた。ヤーコップ・グリムは『古代ドイツの森』Altdeutsche Wälder の中で「ドイツの狩猟員はアカシカの痕跡ついて 72 種類の区別ができ、その大部分は固有の名称を持つ」と述べている（3. Bd. S. 98）。アカシカの痕跡、つまり足跡のみならず、樹木の幹にできた傷、あるいは枝角が引っ掛かって折れた木の枝など、アカシカが通った後の痕跡であると特定することは狩猟制度では最も重要視されたことの一つで、この知識なしにはアカシカ専門狩猟員に任ぜられることが許されなかった。狩猟員はこれらの痕跡からアカシカの存在とその大きさまで判断できた。

私たちには滑稽に思えるのだが、主催者の王侯にどのアカシカを追うか判断を仰ぐ際に、狩猟員はそれぞれのアカシカの糞を角製容器（通常は火薬入れ）に収めて持ち帰り、それを取り出して食事中の主人のテーブルに麗々しく並べた。フランスの狩猟員が糞に重きを置き、糞は動物の種類により名称が区別され、さらにアカシカの糞であると判断するために少なくとも６種類の形状を区別し、それぞれが固有の名称を持っていた。

追走猟の人員

普通規模の追走猟にも一定の人員と多数の猟犬と馬が必要であった。これはフランスではなくドイツのドレスデンのフーベルトゥスブルクで1737年に行われたザクセン選帝侯の宮廷狩猟の例に見られる人員構成であるが、指令官１、副指令官１、青年貴族狩猟官１、貴族狩猟官候補生２、ピケール長（狩猟長）１、ピケール（騎馬狩猟員）４、探索狩猟員（探索犬を連れた徒歩の狩猟員）１、調教師（王の乗馬の）１、厩番１、狩猟用鞍係１、鍛冶職人１、馬医者１、御者２、馬車長１、馬丁12、パン職人１、狩猟音楽奏者６、ならびに追走猟馬88頭、猟犬273頭（そのうちアカシカ追跡用成犬200頭、犬付き少年が連れ歩く若い犬51頭）、さらに従卒狩猟員が連れている探索犬22頭であった。これが基本的な人員構成で、さらに狩猟の騎馬の参加者と馬車の参加者が加わった。この基本的人員には追走猟を可能にするために日々働く狩猟員は含まれていない。

ブルボン家の追走猟

追走猟はフランスで最も好まれ、最もよく行われた狩猟であった。15世紀の半ばころにルイ11世（1461－83）が狩猟の儀式を洗練化し、それまで単に馬による追跡猟であったものから次第に完成した形になり、吠えながら追う猟犬の群、その後を駆ける騎馬、決められた一頭のアカシカまたはイノシシだけを追う、疲れ切って立ち止まったところで槍あるいは剣でトドメを与える、などの追走猟の形式が作られた。当時の追走猟ではまだ時には何日間もアカシカを追うことも有り得たので、追う者が騎馬に巧みで耐久力ある頑健な肉体を持つことが必要であった。16世紀のフランス王であるシャルル９世（1560－74）やアンリ４世（1589－1610）はこの点では申し分なく、頑健でスポーツ的能力に優れていた。ルイ13世（1610－43）の時代に追走猟はいっそう儀式化され、狩猟参加者の間の連絡のためにホルン信号が導入された。ルイ14世（1643－

1715）も華やかな追走猟を行ったが、それは王としての儀礼的仕事のためであり、王は狩猟そのものには関心があまりなかった。また王朝が安定し幼くして王位に就いたルイ14世は体力的にも、戦場を駆け回ったかつての王たちのような頑健さは持ち合わせず、追走猟に向かなかった。そのため王が馬車で通れるよう森に広い並木道が作られ、道は丁寧に平らにされた。華麗な衣装を着た狩猟官が王に代わってアカシカを追走した。アカシカが猟犬の群に足止めされると、狩猟官が馬から下りて、猟刀を抜き、アカシカ後脚の腱（人間で言えばアキレス腱）を切り離した（ドイツ語ではこの腱をHesseあるいはHächseと呼ぶので、狩猟用語で腱を切ることをhessenまたはhächsenと言う）。アカシカは動けなくなりその場に横たわるとホルンで「王を呼ぶ曲」が吹き鳴らされた。それを聞くと、それまで美しい夫人たちのお相手をして楽しんでいた王は華麗な狩猟馬車に乗ったままアカシカの所まで案内させ、馬車を降り、特別なホルン曲の響きの中を猟刀でトドメを与えた。このような快適でスポーツとは呼べない追走猟は後世の王やフランスの地方貴族に受け継がれた。さらに追走をもっと楽にするためアカシカを狩猟の前に銃で傷つけておく習慣まで存在した。

ルイ14世以来フランスの豪華な追走猟は次第に危険の少ない快適な娯楽になった。これについてドイツのハインリヒ・デーベル（1699－1759）は『実践的狩猟』（1746年）の中ですでに「追走猟にはことに巧みで果敢な馬術が必要である。しかし狩猟の主催者である高貴な方は無理をされず、いざという時には馬車で狩猟に参加することもできる。狩猟を指揮し、猟犬たちを統御する本来の仕事は、これについては後で逐一述べるつもりであるが、このために雇っている狩猟員たちの仕事である。従って狩猟主催者はご自身だけに注意をされ、狩猟につかず離れずの位置においでになることができる。この場合でも主催者は犬や狩猟員やホルンの立てる快い響きをお聞きになれる」と述べ、王侯が危険な騎行をする必要がないと説いている。かつてのフランスの王たちは切株や倒木の上をがむしゃらに疾駆したが、ルイ14世は快適さを追及し、森に騎馬用の道と馬車用の道を放射状に設け、王や貴婦人たちは馬車で追走猟に参加した。そして放射状の道が集まる中心に瀟洒な亭が建てられ、参加者はそこに集合し、

休憩した。

ルイ15世は柔弱で弱々しかったにもかかわらず、非常に大胆な追走猟家で、狩猟が出来るだけ迅速に行われることを好んだ。ルイ15世の追走猟には伝記作家の伝えるエピソードがあり、追走猟の実際とその危険性を知ることが出来る。ある時、皇太子妃マリー・アントワネットが王たちの追走猟の成り行きを見るために近くを馬車で走っていた。突然ブドウ園から甲高い悲鳴が聞こえた。彼女は御者にその悲鳴の方向に走るように命じた。近づくと血だらけの男の死体に取りすがる女がいた。ルイ15世の追っていたアカシカがこの男と衝突し、男を角で串刺しにしたのであった。アントワネットは女の膝の上で彼女の財布を逆さにして空にした。同じことを後からやって来た王とその随員がした。ルイ15世はいつものようにこの事件に弱々しい態度を見せ「この子供たちに父親をどうやって再び与えることが出来よう」と嘆いたが、アントワネットは「陛下が女と子供たちの面倒を生涯ご覧になれば、女の苦痛をいくぶん和らげることが出来るでしょう」と言ったという。

フランス王たちの追走猟には何の制約もなかったので、参加者たちはアカシカやイノシシを追ってところ構わず馬を走らせた。森林の中、畑の上やブドウ園の中であろうと猟犬と馬の群が駆け抜けた。畑は荒らされ、作物は踏み潰された。しかし農民はアカシカを傷つけてはならず、畑に柵をする権利も持たなかった。彼らは一方的に狩猟の犠牲者であった。フランス革命にはさまざまな原因が挙げられているが、農民の生活を顧慮しなかった狩猟もその一つに数えられている。革命後の1790年国民公会の布告により狩猟権は土地と結びつけられ、フランス王たちの狩猟と農民の苦しみが終わった。

ルイ16世は若くして王位に就いたが、それ以前からブルボン家に流れている狩猟好きの血が騒いでいた。狩猟だけが彼の情熱で、皇太子時代から日々の体験を綴っていた日記に狩猟の体験も書き込んだ。宮廷儀式よりも狩猟を好み、儀式の最中に渋面をし、早く狩猟に出かけたいという顔を見せた。マリー・アントワネットは結婚の数週間後、母親のマリア・テレージアに「夫は最近消化不良に苦しんでいます。しかしそれは彼が狩猟に行く妨げにはなりません」と

書き送った。しかしアントワネット自身も間もなく狩猟を面白いと思うようになり、狩猟に馬で参加した。マリア・テレージアはそんな風に体を動かすとフランス王室の跡継ぎが出来なくなることを恐れ、狩猟に参加することを止めるように言ったが、無駄であった。

ルイ16世も快適さを追及した。彼は追走猟の集合地にさらに多くの亭を建てた。またヴェルサイユ近くの森からパリのヴェリエールの森まで障害なく追走できるように、古い城壁を取り壊させ、多数の池を埋めさせた。ルイ16世は熱狂的な狩猟家であったが、彼の楽しみが農民に害を与えることを望まなかった。それ故、ムギが伸び始めるとヴェルサイユでの追走猟は終わり、王の狩猟馬車はさらに西のランブイエに移動した。また追走猟の騎馬隊が畑を走り抜けることになった時には王は畑の持ち主に十分弁償をさせた。王はそれまでの王に比べれば農民生活を顧慮したが、それにもかかわらず彼は不運にも革命の犠牲となった。

革命後のフランスの狩猟

パリの国民公会は1789年８月にすべての封建的権利の廃止を宣言し、これに伴う一連の法律は同時にすべての狩猟権と狩猟賦役を撤廃し、すべての狩猟特権を廃止させた。これにより、農民たちはこれまで長年にわたり狩猟動物が自分たちの労働の成果を喰い荒すのをただ見てきただけであったが、その反動として今度は領主の狩猟動物を片っ端から狩り始めた。王侯の狩猟権の廃止の後、それは全ての市民に分け与えられるはずであった。しかし国民公会での激しい議論の末、1790年４月の法律で狩猟権は土地の所有権と不可分となり、土地所有者のみに狩猟権が与えられ、他人の所有地での狩猟が禁止された。ロベスピエールはこの法律に反対で「私は土地所有者だけに狩猟権を認めるとの原則に反対します。私は穀物、牧草あるいはブドウであろうと大地の賜が収穫されたならば、狩猟動物は第一発見者のものだと思います」と無主物説を述べたが、当時はまだ彼の権力は弱く、反対案は否決された。この法律で狩猟権を得た土地

所有者と借地者にはさらに「如何なる時も動物を畑で網またはその他の道具で捕獲しまたは殺す」ことが許可され、動物にとって受難の時代が始まり、王侯たちが多大の費用を注ぎ込んで保護育成して来た狩猟動物が、瞬く間に減少してしまった。当時、狩猟動物は封建制と同義であり、見れば撃たれ、のどかな田園を散歩していても銃弾が耳元をかすめるほどであった。ルイ16世もその狩猟用馬車を売り、フランス追走猟の華やかな一時代が終わった。

フランスで再び狩猟と言えるようになったのは五総裁政府の時代のバラスからで、彼が再び狩猟用馬車を購入した。バラスは革命以前は貴族でバラス伯爵と言い、フランスの全貴族が傾倒した追走猟への情熱は、共和派に彼が変身した後も変わらなかった。セントヘレナのナポレオンは彼の同行者たちによくバラスが狩猟の際に演出した途方もない豪華さについて物語ったという。

ナポレオン

ナポレオンは軍人としてまた政治家として非常に才能があったが、狩猟家としての才能はあまりなかった。ことに彼の射撃の腕は最低であった。狩猟で間違って農夫に当てたり、同行者に命中させたりし、ナポレオンの銃は他人に非常に危険であった。1808年９月にナポレオンとロシア皇帝およびドイツ諸侯との会議がドイツのエアフルトで開かれたとき、彼を歓迎して囲い込み猟が行われた。ナポレオンが銃を構えると、彼の随員たちは前もって掘ってあった穴に慌てて飛び込んで危険を避けた。猟が終わり銃が仕舞い込まれると、狩猟長官が「けが人はありませんか」と尋ね回った。それでもナポレオンは銃に強い火薬を詰め、銃弾を必要以上にきつく詰めたため、しばしば肩や腕や指をケガして帰ることがあった。しかしナポレオンには追走猟のセンスがあり、彼は12時間馬に乗り続け、アカシカやイノシシを追い、少しも苦にしなかった。また彼は勇敢で、ある時、イノシシを追っていたが、イノシシが獰猛であったため狩猟員がみな逃げてしまい、ナポレオンは残った二人と巨大な雄イノシシに対峙し、ついにこのイノシシを仕留めた。

皇帝ナポレオンは素晴らしい狩猟組織を持っていた。それはブルボンの王たちが熱情的な狩猟家であり、民衆にその偉大さを狩猟によって示したからである。狩猟隊列の豪華さ、狩猟員の華麗な制服、馬や猟犬などの嬉しげな様子や華やかさに民衆は圧倒された。ナポレオンはこの点を真似たのであった。従ってナポレオンの下でもブルボン王朝時代と同じように大規模な狩猟が行われたが、それでも王政時代に比べればその費用はずっと少なく、ルイ16世が年間700万フラン支出したのに対し、ナポレオンはわずか40万フランしか狩猟に掛けなかった。

ナポレオン後

ルイ18世の王政復古後、シャルル10世（1824－30）が即位すると祝祭的狩猟が次々と行われた。彼は追走猟では最も大胆な騎手の一人として知られ、高齢にもかかわらずいかなる悪天候も平気で、追走猟の過酷さを何とも思わなかった。まだ鉄道もない時代に王はチュイユー宮を８時に出発し、ランブイエで狩猟を行い、獲物を合計1200（鳥類やウサギ）も仕留め、パリで昼食を食べ、９時には就寝できた。ランブイエには狩猟隊と軍隊、城門には狩猟長、狩猟小姓２名と輝くばかりの制服を着た狩猟員たちが整然と並び、兵士たちはサーベルで敬礼し、宮殿の召使いたちは脱帽して王と王子を出迎えた。そして地元や周辺の民衆が王を見ようと、あるいは王に何かを懇願しようとした。王はこれらの懇願に答え、臣下に命令を下した。彼は片方の手で狩猟をし、他方の手で施しをした。

ルイ・フィリップ（1830－48）はブルボン家の伝統に反して狩猟を好まず、また非常に倹約家で、多額の費用を狩猟に使用することを止め、フランス王の行事から狩猟を外してしまった。

皇帝ナポレオン３世はアメリカ亡命時代にすでに狩猟に目覚め、その熱中の程度は当時のアメリカの新聞によれば狩猟狂の域に達しており、多数の大型動物を倒した。皇帝の位に就いてから、彼は過去のフランス王たちの伝統に倣い

宮廷の華麗さを狩猟の分野でも演出するためパリの近くに低狩猟用の美しい帝室狩猟区を設置し、金に糸目を付けず煌びやかな狩猟団を置き、客に狩猟の豪勢な娯楽を味わわせるため出費を惜しまなかった。この帝室狩猟区と皇帝の狩猟用馬車を維持するために年間ほぼ400万フランが必要であった。狩猟好きにもかかわらず皇帝自身は不安定な政治的状況によりパリを離れることを恐れ、ついにアルプスの雄大な自然の中でアカシカやシャモアを追うことはなかった。

イギリスの追走猟

イギリスでは騎馬によるアカシカ猟はノルマン人がフランスから渡ってきて以来、つまり1066年のノルマン人のイギリス征服以来その伝統となった。その後、他人の土地でも狩猟を行うことのできる排他的狩猟権も大陸から導入されたが、貴族たちに受け入れられず、狩猟権は「許可書」により分与され、16世紀から狩猟用武器の所有と狩猟の実施は土地所有者と高所得者に許可された。イギリスは島国であるため多くの狩猟動物が早い時代にほとんど狩り尽くされてしまったので、フランス式狩猟を採用しながらもイギリス風に改良され、ワナ、網などを用いることをフェアでないと否定し、狩猟動物を猟犬と追走猟によってしか狩ってはならないとした。

アカシカの数が少ないため、イギリスではウサギとキツネの追跡猟が最も人気のある娯楽であった。財産あるものに限られたとは言え、市民も狩猟を行うことができたので、狩猟はますます猟犬と馬のスポーツ、また騎手のスポーツ能力の見せ場となり、獲物を得ることは副次的なことになった。その代表がキツネ狩りである。

キツネ狩り

キツネ狩りは確固とした規則に従って行われたが、今日でもこの規則は通用している。まずキツネ狩りを狩猟家のために準備し、これを指揮する狩猟長で

ある「フォックス・ハウンド長」が参加する狩猟客に挨拶する。約80人の狩猟家と選び抜かれたキツネ狩り用猟犬60頭が狩りに参加する。赤い上着を着て白いズボンをはいた狩猟家たちが婦人たちとともに狩猟開始地点「ミーツ」にいる狩猟長の周りに集まる。猟犬係の長である「ハウンドマン」（副狩猟長）が鞭を携え猟犬の群れを統率する。彼の部下である「ホイッパー・イン」（猟犬指揮者）２名が猟犬を常に把握できるように猟犬の群れの中、または後を騎馬で走る。ほかの「アーススストッパー」（足跡追跡の専門家）は狩猟が行われる前の晩にキツネが住んでいる穴の通り道を刺のある枝と石とで塞ぎ、キツネが猟犬の群れに捜し出されて逃げ回るように細工をする。

ハウンドマンが「行け、行け！犬たち！」と合図を与えると狩猟家たちが馬で後を追う。猟犬はしばらくキツネを探した後、吠え声でキツネが見つかったことを知らせ、キツネをその隠れ場所から追い出す。副狩猟長がホルンを吹き、ちりぢりになっていた猟犬が集まって追い始め、騎馬の群れが早駆けする。人間、馬、犬が渾然一体となって走る。キツネ狩りは猟犬の群がキツネを追い詰めるまで普通４時間から５時間続く。ハウンドマンが動けなくなったキツネの尾を記念の飾りとして切り取り、狩猟家たちが大声で歓声を上げ、ハウンドマンはキツネを猟犬の群の中に投げ込む。猟犬の群れがそれに飛びつき、引き裂き、食り食う。狩猟の後で狩猟家と客たちは狩猟の主催者の館で行われる晩餐会に集い、狩猟の宴が始まる。キツネ狩りでは切り株や石を越え、低木の茂みや堀や垣根を越え、馬を走らせ、危険を克服することがスポーツらしさである。

皇妃エリーザベト

皇帝フランツ・ヨーゼフの妃エリーザベトは追走猟を非常に好んだ。男でも危険な追走猟は女性には一段と危険であった。当時の女性は馬に跨るのではなく、女鞍を着け、両足を馬の背の左側に伸ばした。従ってやや横座りの形になり、早駆けになると安定が良いとは言えなかった。しかし皇妃は日々の宮廷行事に精神的に疲れ、追走猟にそのはけ口を見出した。広い空間を馬で駆け、馬

に全精神を集中させ、あらゆる自然の障害を無条件で克服し、常に猛スピードで、命を懸けて駆けている間、皇妃には一切の悩みを思い煩う余裕がなかった。彼女は幼い時から乗馬に慣れ、曲乗りまで習得したとはいえ、追走猟を始めたのは35才からで、年令的にも危険なスポーツには適さなかった。

皇妃エリーザベトはハンガリーでキツネ狩りをよく行なった。ハンガリーはキツネ狩りを行うのに地形的に適していた。起伏に富んだ丘陵地帯があり、森林には障害となる低木が生え、さらに池や沼が多かった。1872年12月にゲデレーで行われたキツネ狩りをあるウィーンの新聞は「皇妃のキツネ狩り」の見出しの下に「口から泡を吹いている馬に乗り、飛ぶようなギャロップでキツネを追うのは、危険のない娯楽ではない。高貴な方々が出来る限り快適に狩猟出来るように、たいていの場合追走猟のために一度捕らえたキツネに印を付けて放す。猟犬が放たれ、いよいよ気違いじみた狩猟が始まる。ヤブを越え、垣根を越え、堀を越え、小川を飛び越し猟犬の群が追う。最も大胆で向こう見ずな騎手が最終段階にやって来る。これが、死ぬまで追われ恐怖と疲労で死につつある動物が、猟犬たちに引き裂かれ、あるいは騎手のトドメによって殺される瞬間である。大胆な騎手にこれ以上の喜びはない。それ故、我が最も優秀で大胆な騎手である皇妃がたとえキツネ狩りに参加されても我々は驚くにあたらない」と批判的に取り上げた。

エリーザベトは1876年キツネ狩りの本場イギリスに渡り本格的なキツネ狩りの乗馬技術を習った。1879年彼女は初めてアイルランドに出かけた。アイルランドの追走猟はイギリスよりもいっそう高度の技術を要求し、危険であったが、彼女はこれにも合格した。彼女はお忍びで旅行したが、彼女のアイルランド滞在は政治問題となった。カトリック王家の一員であるエリーザベトにカトリックのアイルランド人がすっかり熱狂し、これがイギリス王室に不快感を与えた。このため彼女は政治的配慮をし、それ以降はイギリスでのみ追走猟をした。皇帝フランツ・ヨーゼフは皇妃の追走猟好きを受け入れたが、絶えず事故を心配していた。（以下次号）

2002年11月27日